

御嶽山と東海地域の木曾川流域圏—名古屋市内で御嶽山を巡る—

谷口智雅（三重大学・人文）

1. はじめに

御嶽山およびその周辺は、かつては御用林であり、現在も国有林として伊勢神宮の式年遷宮の御用材として木曾ヒノキなどの林業が盛んである。また、豊富な水資源から主に関西電力による水力発電が行われている。東海地域は主に中部電力管轄であるが、送配電事業で連携されており、北陸電力と合わせて3社による広域需要調整によって電力の恩恵を受けている。御嶽山南麓を流下する王滝川は名古屋市の水道水源である木曾川の上流域にあたり、牧尾ダムは愛知用水の水源でもある。木曾御嶽山は地理的には長野県であるが、流域・インフラの観点からは東海地域に大きく関わりがあると言える。木曾川流域の水源地域である王滝村では「水と緑のふるさと寄付金」や「水源の森づくりパートナー」の募集など下流域の支援や交流を提案している。

2. 堀川概要

堀川は、名古屋城西の幅下と熱田宮の渡しとを結ぶ延長約6kmの河川として1610年名古屋城の築城時に開削されたと伝えられている。その後、上流部の開削や下流部での新田開発などが進み、庄内川より分かれ、矢田川を暗渠で横断し、名古屋城の西から熱田台地の西に沿って南下し、名古屋港へ注ぐ延長16.2kmの河川となった。堀川は、名古屋の幹線輸

送路として重要な役割を果たし、米や塩、木材など多くの物資が船によって城下へ運ばれ、沿川には、大規模な藩の蔵、水軍関係者の屋敷などが設けられていた。現在の名古屋国際会議場には白鳥貯木場が置かれ、木曾・飛騨からの御料材が搬送されていた。

3. 堀川周辺の地理的事象

白鳥貯木場の廃止に伴って同地域は再開発されたが、貯木場の史跡を見ることができる。また、関連した名残として堀川沿岸には現在もいくつかの木材店が立地している。同地域に位置する白鳥公園は、御嶽山に見立てた築山を水源とする流れを木曾川として、木曾川流域の地形を模した回遊式庭園となっている。下流対岸の大古瀬公園（儀寛；1769-1842、尾張熱田の宮丸講の祖の生誕地）には御嶽山を模したとも言われるすべり台が設置されている。名古屋城北にあるメタウォーター下水道科学館などには、水源の木曾から名古屋の上水、下水道に至る水の流れの展示も見ることができる。

4. おわりに

現在御嶽山南麓の調査を行っているが、堀川周辺の巡検を授業の一部として学外実習の実施を行っている。木曾・御嶽山の陸水環境の学びの一側面として、これらを含む地理的事象に触れる機会を構築することが今後の課題である。



図1 堀川沿岸の貯木場（左：1920年頃地形図、右：1961-64年航空写真）

この地図は、時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」((C)谷 謙二)により作成したものです。URL <https://ktgis.net/kjmapw/>